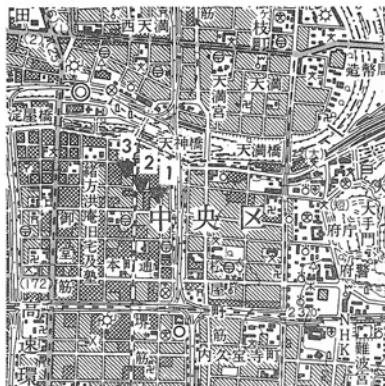


大阪・大坂城下町跡



(大阪東北部)

- 1 所在地 一大阪市中央区平野町一丁目、二大阪市中央区道修町一丁目、三大阪市中央区伏見町二丁目
- 2 調査期間 一九九一年(平3)一〇月～一九九二年四月、二一九九二年一月～五月、三一九九二年四月～七月
- 3 発掘機関 効大阪市文化財協会
- 4 調査担当者 一松尾信裕・積山洋・清水和、二伊藤純、三積山洋・豆谷浩之
- 5 遺跡の種類 集落・近世城下町跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

大阪の船場地域は、慶長三年(一五九八)の大坂城の丸建設に伴い新たに開発された城下町である。それ以後、大坂の商業活動の中

心地として繁栄している。これまでの調査成果では、城下町開発以前から、この地域には人々が生活していたことが明らかになっている。古い遺構は弥生時代に遡り、その後、奈良・鎌倉・室町と各時代の遺構が確認されている。今回木簡が出土した各調査地は、比較的早い段階から開発が進んでいたと考えられる船場の北部に位置している。

一 OJ九一～二次調査

調査地は東横堀川と堺筋のほぼ中間、平野町通りと道修町通りにはさまれた地点である。中世から江戸時代までの遺構・遺物が検出されており、城下町開発以前の遺構には井戸や大溝がある。この大溝は調査地を南北に縦断し、この調査地の北の調査地点でも検出されている。大溝の埋土は大きく二層に分かれ、下層が水成粘土で、上層が人為的な埋土である。下層から出土する遺物は一四～一五世纪の瓦質土器が多く、この頃に掘削されたと考えられる。上層から出土する遺物には一六世纪末の遺物があり、さらに、人為的な埋土であることから、城下町開発の際の整地によって埋め立てられたと考えている。ここに報告する木簡(1)(2)は、この大溝の下層埋土上部から出土したものである。また(3)(4)は、大坂の陣の後に形成された町屋敷の奥手に作られた廃棄土坑から出土したものである。一七世紀前半の遺物が共伴している。

二 OJ九一～一次調査

年 代	出土位置	点 数	主 な 内 容
豊臣氏大坂城前期	土壤 盛土層	1 2	布百四拾端ノ(伊)勞太神宮 あかむろ (1)
	小計	3	
豊臣氏大坂城後期	土壤① 土壤② 土壤③ 土壤④ 盛土層	2 2 5 22 27	さば (判読不能) あじ、さば、小たい 慶、飼、はも、さば さば、とびうお、かしら、むろ (2) (3)(4) (5)
	小計	58	
徳川氏大坂城期	廃棄土壤 井戸① 井戸②	151 1 1	大さかてんま丁、かます、うるめ、あじ いさき、しまあじ、さば、いとより ふし、かしら、むろ、たい、ひたい、え そ、はも (判読不能、板状) むろ (6)～(10)
	小計	153	
	計	214	

表1 OJ 92-1次調査 出土木簡一覧
((1)～(10)は写真・叢文に対応)

調査地は、道修町通りを堺筋から東に入った地点で、一の調査地の西約100mの位置にある。木簡は、大坂の陣の焼土層を切る廃棄土坑から出土した。共伴している陶磁器から、一七世紀前半頃に廃棄されたものと考えられる。出土点数は、合計七二点である。

三 OJ 92-1次調査

調査地は伏見町通りを堺筋から西に入った地点である。本調査地での出土木簡は合計一二四点。時代別内訳は、豊臣氏大坂城前期(大坂城三の丸築城「慶長三年」以前)三点、豊臣氏大坂城後期(大坂の陣「慶長十九・二〇年」以前)五八点、徳川氏大坂城初期(大坂の陣以降「慶長十九・二〇年」以後)五二点である。

(一) 豊臣氏大坂城前期
一六世紀後半の盛土層から木簡二点が出土した。またこの盛土層上面から掘込まれた土坑からは、(1)が出土している。同じ土坑から鬼瓦を含む多量の瓦が出土しており、瓦葺建物に伴う遺構と考えられる。

(二) 豊臣氏大坂城後期

大坂の陣の焼土層直下の遺構面で、東西に軒を連ねる数軒の礎石建物が検出された。(2)～(5)は、これらの屋敷地奥手の土坑および盛土から出土している。出土位置の分布状況からみて、特定の屋敷地からまとまって出土していることが考えられる。

(三) 徳川氏大坂城初期

木簡(6)～(10)はいずれも、大坂の陣の焼土層直上の盛土層上面から掘込まれた廃棄土坑から出土したものである。陶磁器類の組成から大坂の陣後ごく早い段階の遺構と考えられる。この土坑から、削屑を含む合計一五一点の木簡が出土している。共伴する遺物には、木簡以外の木製品のほか、魚類の骨や鱗、貝殻などがある。また、この土坑以外に、一七世紀代の井戸二箇所から木簡が各一点ずつ出土している。

8 木簡の叢文・内容

OJ 92-1次、92-2次調査出土木簡については、出土点

数が多数であるため、代表的な木簡の釈文を掲げることにする。

一〇九一一一次調査

- ・×本の内 経右衛門
- ・「本の内

(105)×17×5 081

「ヽいセキ」

- ・「ヽ十石の内一郎 〔総力〕 □右衛門」

122×27×3 032

「ヽ□」

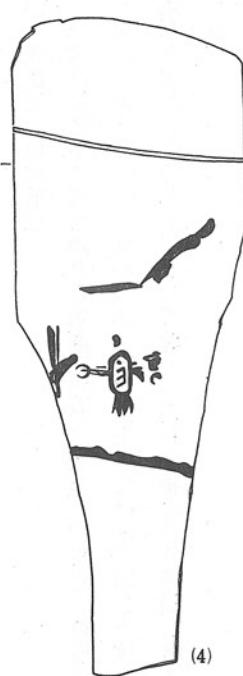
」

187×23×4 032

(1)～(3)は形態からいすれも荷札木簡と推定される。また、(4)（図面参照）は薄板に絵を描いた後、へら状に加工したものである。このほか「ヽ」に似た墨書のある角蓋板(308×236×7)が出土している。

二〇九一一一次調査

- (1) 〔屋号〕 ヽ中 百五十入 四郎左衛門 (135)×18×4 033
- (2) □□五百入 (142)×18×4 033
- (3) •「〇五郎右衛門殿 可兵衛」
- 「〇五郎右衛門殿 可兵衛」 144×29×3 011



(4)



(3)



(2)



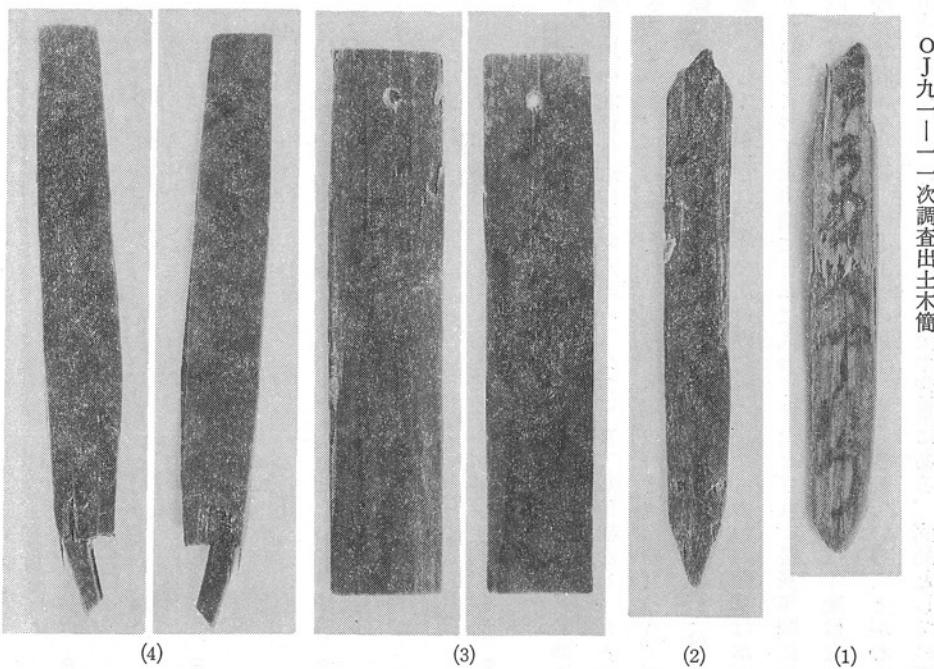
(1)

0 5 10cm

O J 91-2 次調査

1992年出土の木簡

〇九一一一次調査出土木簡

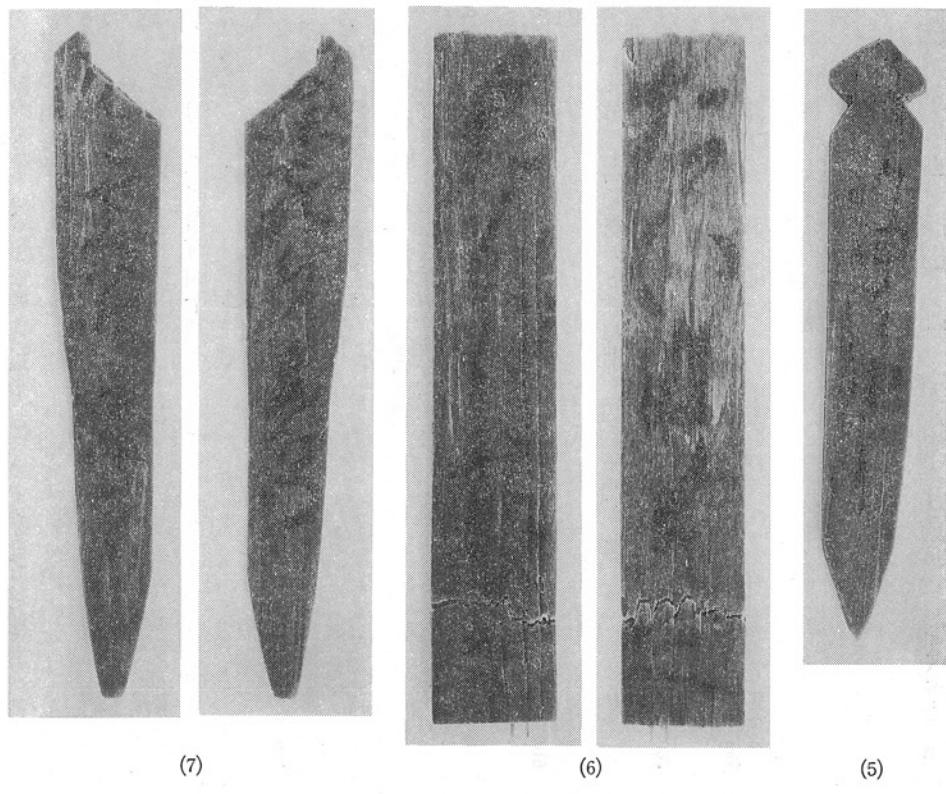


(4)

(3)

(2)

(1)



(7)

(6)

(5)

の流通の一端を知ることのやめる資料である。

157×20×3 051

三〇九二一一次調査

豊臣氏大坂城前期土坑

(4) 「大きは百入」

・「多右衛門」

(5) 「▽竹田□□」

・「▽□□」

(6) 「たい□五十八」

・「たい□□」

(7) ×はこ
・正味七拾斤 吉左衛門」

〔たか〕
□はこ七拾斤 正味」

(177)×30×2 059

185×33×5 011

豊臣氏大坂城後期土坑

(1) • ▽布百四十端

〔伊カ〕
□勢太神宮
□□開□」

(198)×44×9 032

(2) □わは五十□志合さは「百
× わ十六□
以上合物□百六十六」

• × 与三左衛門殿 □大夫」

(256)×61×4 019

(3) • 「▽鮑から付四十 □右衛門尉」
• 「▽えゝ□□」

172×17×5 032

(4) ×慶×

(52)×(13)×3 081

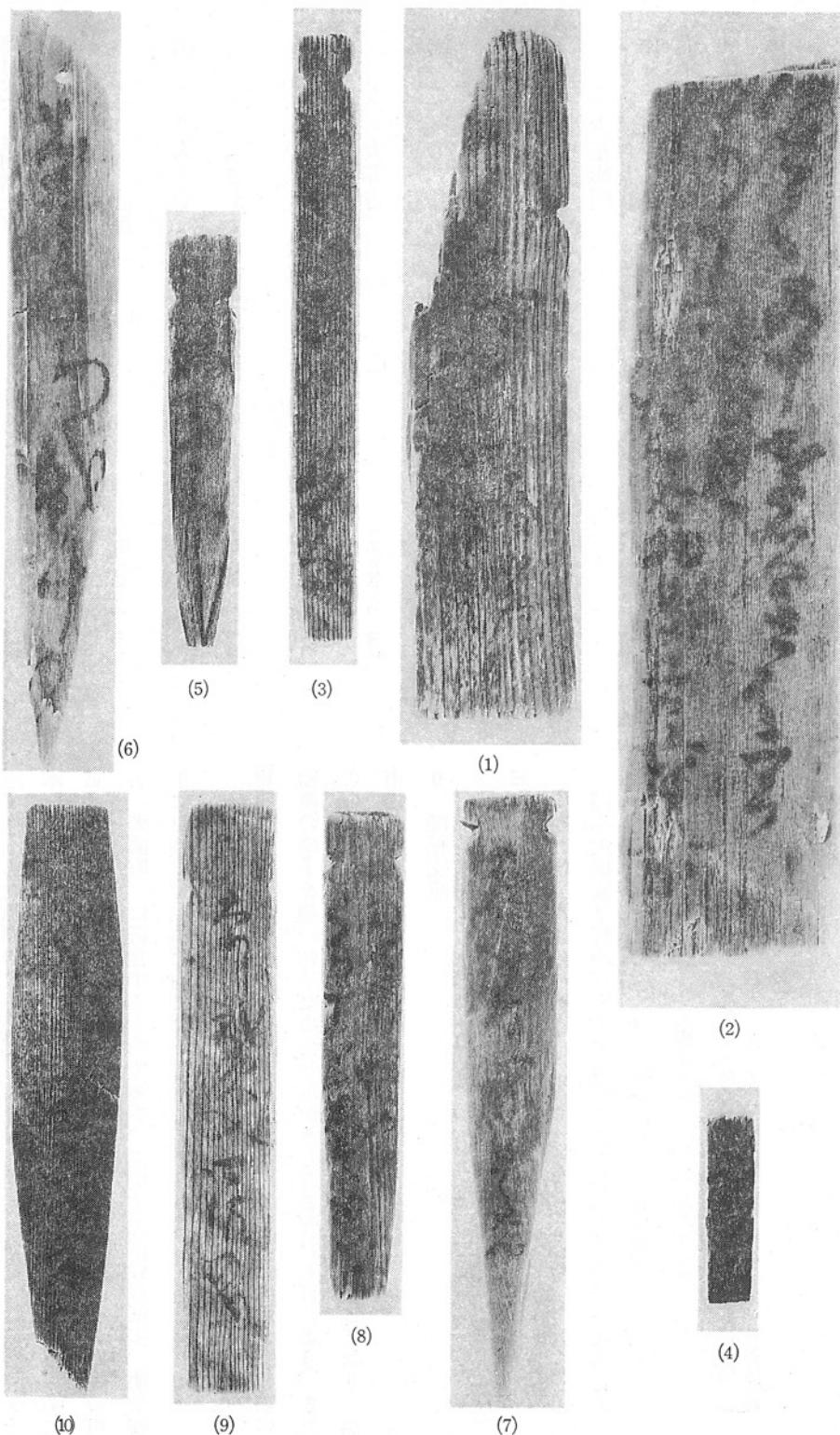
豊臣氏大坂城後期盛土層

いすれも荷札木簡である。(4)(6)には「大きは」「たい」とあり、調査地の北側付近に元和八年(一六二二)まで魚市場があつたとされることから、当地にもこれと関連する施設があつたのだろう。(7)は煙草の荷札である。「正味」とあることから、加工前の葉ではなく、製品として加工されたものに付けられていたものか。煙草はポルトガル船によって豊臣期に日本に入ってきたとされ、慶長年間には国内でも栽培が始まっていたようである。この木簡には年紀はないが、慶長年間の少し後、一七世紀の前半に廃棄されていることがわかり、急速に広まつていった喫煙の風習の背景にある、商品としての煙草

114×18×4 033

1992年出土の木簡

〇九二一一次調査出土木簡



徳川氏大坂城初期土坑

- ・「○志まあち武十入」

216×32×3 051
・「○ 志郎」

- ・「▽大さかてんま丁 五郎右衛門尉」

176×28×7 033
・「▽大さかてんま丁 五郎右衛門尉」

- ・「▽いとより拾五
くち十をふゑそ五つ」

146×26×7 032
・「▽大郎吉」

- ・「▽大ふし武束入 四佰入内」

169×29×6 032
・「▽物右衛門殿 久右衛門」

- ・「ふし一兵衛二□六郎×

(170)×32×3 051
・「少左衛門
八月五日」

9 関係文献

松尾信裕 「道修谷」から道修町へ」(助大阪市文化財協会『葦火』三九 一九九二年)
伊藤 純 「大坂の陣のころのうつわ」(同『葦火』四〇 一九九二年)
同 「大坂城下町のベネチアングラス」(同『葦火』四一 一九九三年)
中尾芳治 「大坂城跡」(『木簡研究』九 一九八七年)
紹介した木簡をはじめ、本調査地で出土した木簡の大部分が魚介名を記した荷札木簡である。堺筋をはさんだ現在の伏見町周辺は、豊臣時代(天正年間とする説と慶長二年とする説がある)から元和八年(一六二二)までの間魚市場が存在したと言われており、一九八六、七年度の調査でも魚市場関係の木簡が大量に出土している。本調査

(一) 松尾信裕・積山 洋・清水 和、(二) 伊藤 純、(三) 積山 洋・豆谷浩之、积文 鳥居信子・豆谷浩之